

コレクション展 めでたづくしー鍋島焼の吉祥文様ー

出品リスト

会期：2018年11月27日（火）～ 2019年1月14日（月・祝）

●はじめに

江戸時代、九州・佐賀藩から将軍家への献上品とされた鍋島焼。格調を高く保つために厳しく規格が定められており、器種は高い高台（こうだい）をもつ深い丸皿が中心です。絵付けには、抑制の効いた染付線で輪郭を引き、その中を赤・緑・黄という限られた色数の上絵具で塗る色絵技法が採られました。

鍋島焼の文様には、献上という目的から、おめでたい意味や幸福への願いを託した文様——吉祥（きっしょう）文様が多く取り入れられています。その多くは中国からもたらされ、日本に浸透していったものですが、日本独自の吉祥文様も少なくありません。中国の工芸品には発財や立身出世、夫婦和合など個人的な願いを託した文様も多くあらわされていますが、鍋島焼には長寿や厄除け、子孫繁栄、富貴と栄華など、将軍家をはじめとした献上・贈答先の永続的な繁栄を願っているとみえる文様が多いのも、特徴的です。本展では、鍋島焼にあらわされた文様がもつ意味を読み解きつつ、精緻にあらわされた意匠の美をお楽しみください。

●歳寒三友とめでたき文様

冬枯れの時期であっても、常緑を保つ松、竹、そして春に先駆けて咲く梅は、中国で「歳寒三友（さいかんのさんゆう）」と呼ばれ、寒い冬に友とすべき3つのものでされました。「歳寒」は、単に冬の寒い季節という意味だけではなく、乱世や逆境などを暗示し、苦しいときであってもいつまでも変わらない友情の喩えや、友とするにふさわしい高潔な人柄などを象徴しています。松・竹・梅のほかに、梅・水仙・竹を組み合わせることもあります。

松・竹・梅・水仙、それぞれに長寿や子孫繁栄など吉祥慶賀の意味が託されていることから、日本ではおめでたい文様として浸透し、正月飾りなどにも用いられています。

作品名	窯名	員数	時代	所蔵
青磁染付 宝尽文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
色絵 松竹梅文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
松竹梅蒔絵組杯		3枚	江戸時代後期	本館蔵 カザールコレクション
染付 松竹梅霞文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀後半	本館蔵 田原コレクション
染付 青海波若松文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀後半	本館蔵 田原コレクション
青磁色絵 梅樹文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
染付 梅文輪花三方割皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
青磁染付 松文皿	鍋島焼	3枚 (5枚の内)	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
色絵 水仙文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
染付 水仙文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 19世紀	本館蔵 田原コレクション

●長寿延命と厄除け

松や竹と同じように、冬枯れの季節に常緑を保つ万年青（おもと）や橘、椿は、日本では長寿を象徴する文様と解されます。四季を通して開花する薔薇もまた、「長春花」の別名をもち、長寿をあらわします。

また、中国では古くから菊は邪気払い、延命長寿の霊薬と考えられており、平安時代には日本にも伝わって重陽の節句（9月9日）に観菊の宴を催したり、菊酒を飲んだり、菊の着綿（きせわた）で身体を清めるなどの宮中行事が行われました。桃は、中国の女仙・西王母の庭に生る蟠桃（ぼんとう）という邪気を払い長寿を与える仙果の伝説から厄除け、長寿の吉祥文様です。日本でも『古事記』や『日本書紀』に魔除けの効果が記されています。

柳は生命力が強く、枝葉には薬効があることなどから厄除けの効果があらわされています。南天は「難転（難を転ずる）」に通じることから、正月飾りを彩る縁起物となっています。

作品名	窯名	員数	時代	所蔵
色絵 万年青文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 19世紀	本館蔵 田原コレクション
染付 楓橘懸橋文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀後半	本館蔵 田原コレクション
染付 橘文六角皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 菊花流水文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 菊唐草文猪口	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
染付 薔薇水仙文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 蔓薔薇文猪口	鍋島焼	1口	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 蔓薔薇文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
青磁染付 椿文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 椿文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
染付 椿樹文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
染付 桃文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
染付 桃文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀末～19世紀初期	本館蔵 田原コレクション
染付 柳文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀末～19世紀初期	本館蔵 田原コレクション
青磁染付 柳文輪花皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀後半	本館蔵 田原コレクション
青磁色絵 南天文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション

●五穀豊饒

日本では古来より雪の降雪量によって、稲作の豊凶が占われてきたことから、雪は五穀豊穰を願う吉祥文様です。また、桜は、田の神様の依り代と考えられてきたことから、雪と同様、その開花状況によって稲作の豊凶が占われ、豊作や無病息災への願いが託されました。

作品名	窯名	員数	時代	所蔵
染付 雪景山水図皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀初期前半	本館蔵 田原コレクション
色絵 桜花束柴文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 桜花籠文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション

●初期の鍋島焼

鍋島焼が創出された初期の段階(17世紀後半)では、盛期の鍋島焼(17世紀末以降)にみられる規格がまだ定まっていませんでした。そのため、上絵付には金や銀、紫、黒などの多くの色を用いるほか、形を丸くない変形の皿としたり、龍や鶴などの動物文様をあらわしたりするなど、その後の鍋島焼とは異なる特徴がみられます。しかし、やはり格を上げるために高台(こうだい)を高くし、意匠には吉祥文様を多く取り入れています。例えば、瓢箪はひとつの実の中に多くの種がなる蔓性植物であることから子孫繁栄を意味し、大根は語呂合わせから「大黒天」をあらわします。草紙は紺紙金野であることから仏教と関連づけることができ、仏の加護を願う意匠とも読み取れるでしょう。鱗や角のない螭龍(ちりゅう)は、祈雨避邪の神とされています。尾長鳥は、鳳凰に通じる文様としておめでたい意味が与えられています。

作品名	窯名	員数	時代	所蔵
染付 龍唐花文菱形皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
薄瑠璃釉色絵 唐花文菱形皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
色絵 芥子文木瓜形皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
色絵 唐花文変形皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
色絵 牡丹文変形皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
色絵 菊文変形皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
瑠璃銹釉金銀彩 草紙形皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
青磁染付 梅樹文変形皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
染付 松文変形皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
薄瑠璃釉染付 鶴文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
染付 尾長鳥文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
青磁色絵 瓢文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
青磁染付 大根文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション

色絵 菊唐草文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
染付 牡丹唐草文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション
色絵 桜樹文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀後半	本館蔵 田原コレクション

●子孫繁栄

柘榴や羊歯、蒲公英のように、多くの実や種、胞子をつける植物には、多子多孫、子孫繁栄の願いを読み取ることができます。また、小さな藍色が密集している様子から「集(あぢ・あづ)真藍(さあい)=」と呼ばれたという紫陽花は、「藍」が「愛」に通じるとして寵愛を願う文様とされたとの伝があります。

作品名	窯名	員数	時代	所蔵
染付 柘榴文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 柘榴文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
染付 蕨羊歯文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 岩田久子氏寄贈
色絵 蒲公英文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	個人蔵
青磁染付 紫陽花文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション

●未来永劫続くことへの願い

蔓が途切れなく繋がっていく唐草文や、波文様がどこまでも広がる青海波(せいがいは)は、永続性をあらわす文様です。長寿や子孫繁栄、富貴などを象徴する文様とともに、そのよろこばしいことが未来永劫続くようにという願いを託し、背景などに充填されることが多い文様です。しかし、「色絵 毘沙門亀甲文皿」のように、そうした充填文様が主文様として表されているのが鍋島焼の新規性であり、意匠の楽しさの一つです。

作品名	窯名	員数	時代	所蔵
色絵 毘沙門亀甲文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
染付 唐花唐草文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
色絵 唐花唐草文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 唐花唐草文猪口	鍋島焼	1口	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 唐花唐草文猪口	鍋島焼	2口 (5口の内の)	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 水葵文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション

●富貴と栄華

牡丹は、中国においてその豪華な花ぶりから「百花の王」とされ、富貴を象徴します。芙蓉は、その発音が「芙=富(fu)」「蓉=榮(rong)」に通じることから栄華をあらわし、いずれも日本でも好まれた文様です。「色絵 花籠文皿」にあらわされた植物は金木犀(桂花)で、「桂=貴(gui)」に通じることから、高貴などを連想させます。鶏頭は、にわとりの鶏冠(とさか)に形が似ることから「鶏冠花(けいかんか)」とも呼ばれ、「冠=官(guan)」に通じることから立身出世を意味する文様です。紅葉や楓もその形状が鶏冠と似ることから、同様の意味を持つほか、「楓=封(feng)」に通じることから、官職に封じられること、やはり立身出世を寓意します。

作品名	窯名	員数	時代	所蔵
染付 牡丹文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀末～19世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 牡丹唐草文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
染付 芙蓉文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
色絵 花籠文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 鶏頭文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 岩田久子氏寄贈
染付 鶏頭文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション
色絵 紅葉流水文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	本館蔵 田原コレクション
色絵 紅葉流水文皿	鍋島焼	1枚	江戸時代 17世紀末～18世紀初期	個人蔵
青磁色絵 紅葉竹垣文皿	鍋島焼	3枚 (5枚の内の)	江戸時代 18世紀前半	本館蔵 田原コレクション

●参考:鍋島焼の変遷

	作品の特徴	背景
17世紀中期～後半 鍋島焼萌芽期	<ul style="list-style-type: none"> ●初期の鍋島焼と近似した特徴をもつ、有田で作られた磁器。 ●裏面が無文の変形皿で、かつて「松ヶ谷」と称された作品の多くは、このタイプに属す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●1640年代に有田の岩谷川内山<small>いわやごうちやま</small>に藩の御用品を焼く「御道具山」が開かれたとされる。
17世紀後半 初期鍋島	<ul style="list-style-type: none"> ●器形：規格が整えられる盛期以前の鍋島焼。さまざまな形の浅い小皿が中心。 ●色使い：金彩や紫などの上絵の具を用いたり、錆釉<small>さびゆう</small>を施した作品も少なくない。表文様には赤の輪郭線を多用しているものも。 ●文様：唐花など、鍋島焼が得意とする文様が登場。裏文様は盛期と比べ文様の種類が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ●初期鍋島の陶片が大川内山の日峰社下窯跡から出土。 ●『徳川実紀』慶安4年（1651）4月19日に、3代将軍・家光が「今利新陶の茶碗皿」をご覧になったという記録あり。
17世紀末～18世紀初 盛期鍋島	<ul style="list-style-type: none"> ●器形：木盃形<small>もくはいがた</small>と呼ばれる深い皿に高い高台の付く形。 ●色づかい：染付の青と色絵の赤・黄・緑の4色に限定。 ●文様：植物文様や器物文様を中心に、斬新な構図で描かれている。裏文様の種類も数種類に限られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●元禄6年（1693）、2代鍋島藩主光茂から有田皿山代官に向けた「手頭」<small>てがしら</small>（指令書）が残る。→鍋島焼のスタイルの確立。 ●鍋島家伝来の図案帳に「元禄9年」の書き込みのある鍋島焼の図案が残されている。
18世紀前半～後半 中期鍋島	<ul style="list-style-type: none"> ●色づかい：色絵はほとんど見られなくなり、染付と青磁が主体となる。 ●文様：風景図など、盛期にはあまり用いられない文様も登場。 	<ul style="list-style-type: none"> ●8代将軍・吉宗の「減少令」により、献上品の全体的な見直し → 鍋島焼の色数の制限。
18世紀末～1871 後期鍋島	<ul style="list-style-type: none"> ●色づかい：染付に上絵の赤を加えた2色づかいの作品が増える。 ●器形の多様化。 ●精度の低下。 	<ul style="list-style-type: none"> ●安永3年（1774）、幕府から10代将軍・家治好みの品を作るようにとの通達。 ●安政4年（1857）、月次献上の5年間免除。 ●明治4年（1871）の廃藩置県により藩窯廃止。

大阪市立美術館

Osaka City Museum of Fine Arts

